一橋大学博士学位申請論文審査報告書

平成 31 年 2 月 28 日

申請者：小林綾子（こばやし あやこ）
論文題目：内戦下の人道アクセス：国際的・国内的正当性をめぐる反乱軍の政治
審査員：山田敦（主査）、秋山信将、市原麻衣子

国内武力紛争（内戦）による犠牲者は、戦闘や暴力に巻き込まれた人々だけではない。外部から食料や医療物資が届けられず、食べるものや治療を受けることができずに命を失う人々もまた多数存在する。それが内戦下の人道アクセス問題である。本論文は、内戦の当事者のうち反乱軍に焦点を当て、なぜ人道アクセスを受け入れる反乱軍と、それを拒否する反乱軍がいるのかという問いを立てる。論文は、研究目的を述べた序章、先行研究のレビューを含めて問題の所在を詳述した第２～３章、本論文の仮説を提示する第４章、仮説検証のための事例研究である第５～７章、分析結果をまとめた第８章から成る。

本論文には、以下のような優れた特徴が認められる。第１に、広範な先行研究を的確に整理し、人道アクセスが今日、なぜ、どのように問題であるかを明確かつ説得的に読者に提示している点である。第２章では、筆者が「平和構築 2.0 時代」と呼ぶ現代において、内戦下の人道援助問題が政治的、人道的、法的に複雑さを増してきた様相が描き出される。続く第３章では、援助に対する反乱軍の姿勢もまた一様ではなくなっていることが示され、その姿勢に影響を与える諸条件が整理されている。

第２に、反乱軍が人道アクセスを受け入れる場合とそうでない場合について、独自の仮説を構築し、汎用性をもたせた理論的分析を志向している点である。第４章は、反乱軍を４つのタイプに分類し、タイプに応じて人道アクセスの受け入れ姿勢が異なってくることを、論理的に説明した部分である。また、人道アクセスを形式的に受け入れるだけの反乱軍と、実質的に受け入れようとする反乱軍の違いも強調される。

第３に、上記の仮説の検証のため、精緻な事例研究を行っている点である。第５章はエチオピア・ティグライ人民解放戦線、第６章はスーダン人民解放運動・軍、第７章はアンゴラ全面独立民族同盟の事例研究である。資料的制約がある中で、それぞれの反乱軍のとった政策について、社会科学的な手順を遵守しつつ、丁寧な仮説検証がなされている。

もちろん問題がないわけではない。本論文は、反乱軍を４つのタイプに類型化しており、これが論文の主たる関心である反乱軍による人道アクセスの可否の分析に重要な役割を果たしている。この部分は大いに評価すべきところであるが、この類型化に使用されたサンプル数が十分ではなく、類型の妥当性への疑問が払拭しきれない。また、本論文が所与とする人道支援の主体は欧米アクターのみであり、非欧米アクターを排除した分析となっている点でバイアスが生じていることが懸念される。とはいえ、これらの問題は小林氏自身が今後の研究課題としており、本論文の価値そのものを損なうものではない。

以上のような論文の評価と口述試験の結果に基づいて、審査員一同は、申請者小林綾子氏に一橋大学博士（法学）の学位を授与することが適当であると判断する。